

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

三田谷Ⅱ遺跡
上沢Ⅰ遺跡

1994年3月

教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

三田谷Ⅱ遺跡
上沢Ⅰ遺跡

1994年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成3（1991）年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の調査を行っています。本書は平成3（1991）年度から平成5（1993）年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、三田谷Ⅱ遺跡及び上沢Ⅰ遺跡についてその調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の2大河川によって形成された山雲平野は、島根県下でも有数の遺跡集中地域であり、「出雲風土記」にもその様子が記載されているように、歴史的文化遺産に恵まれているところです。今回は斐伊川放水路の開削部のうち、主として神戸川との合流部分にあたる上塩治町一出谷地区の調査を行いました。この調査により、6、7世紀ごろのものとみられる横穴式石室をもつ古墳や土坑墓などがみつかりました。いずれも、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となりうるものであります。

本書が、多少なりとも地域の埋蔵文化財に関する理解に役立てば幸いに思います。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたりましては建設省出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げる次第です。

平成6年3月

島根県教育委員会教育長

今岡義治

例　　言

1. 本書は、1991（平成3）～1993（平成5）年度の3カ年にわたって島根県教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受けて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち下記の遺跡の発掘調査報告書である。

三田谷Ⅱ遺跡　　島根県出雲市上塩治町3,104外

上沢Ⅰ遺跡　　島根県出雲市上塩治町2,874

2. 図中の方位は、国上調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。したがって磁北より $6^{\circ}50'$ 、真北より $0^{\circ}-20^{\circ}$ 東の方向を示している。

3. 出土遺物および実測図・写真は、島根県教育委員会で保管している。

4. 掲載図面は主に鳥谷芳雄、林健亮、定方克之、山岡清志、永井宏昌、黒崎康明、岩橋孝典、永島いずみ、金坂恵美子、釣宮和子、来海順子が作成した。写真は鳥谷芳雄、林健亮、定方克之、山岡清志、永井宏昌、黒崎康明が撮影した。

5. 本書に使用した遺構略号は、SXが古墳および土坑墓、SKが土坑、SDが溝跡を表している。

6. 本報告書は調査担当者が協議し、鳥谷、永井が編集した。また、本書の執筆分担は、文末に記すとおりであるが、付篇については三辻利一奈良教育大学教授に御寄稿いただいた。

本文目次

I	調査に至る経緯と調査の経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過	2
3.	調査の組織	4
II	位置と環境	6
III	トレンチ調査と三田谷Ⅱ遺跡	13
IV	三田谷Ⅱ遺跡1区の調査	21
1.	調査区の設定と層序	21
2.	1区検出の遺構	22
3.	1区出土のその他の遺物	42
V	三田谷Ⅱ遺跡2区の調査	61
1.	調査区の設定と層序	61
2.	2区検出の遺構	63
3.	2区出土のその他の遺物	67
VI	上沢Ⅰ遺跡の調査	84
1.	遺跡の位置と調査の概要	84
2.	遺構の概要	85
3.	小結	86
VII	まとめ	87
1.	遺構について	87
2.	遺物について	88
付	三田谷Ⅱ遺跡出土上器の蛍光X線分析	91

挿図・表目次

第1図 調査対象地位置図	1	第40図 1区出土遺物実測図(2)	44
第2図 楊伊川・神戸川及び調査地点位置図	2	第41図 1区出土遺物実測図(3)	45
第3図 楊伊川放水路事業計画図	3	第42図 1区出土遺物実測図(4)	46
第4図 出雲市周辺遺跡分布図	7	第43図 1区出土遺物実測図(5)	47
第5図 楊伊川放水路事業開削部分遺跡分布図	11	第44図 1区出土遺物実測図(6)	48
第6図 三田谷Ⅰ遺跡トレンチ配置図	13	第45図 1区出土遺物実測図(7)	49
第7図 三田谷Ⅱ遺跡調査区位置図	14	第46図 1区出土遺物実測図(8)	50
第8図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ上層断面図(1)	15	第47図 1区出土遺物実測図(9)	51
第9図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ上層断面図(2)	16	第48図 1区出土遺物実測図(10)	52
第10図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ土層断面図(3)	17	第49図 1区出土遺物実測図(11)	53
第11図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ土層断面図(4)	18	第50図 1区出土遺物実測図(12)	53
第12図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ土層断面図(5)	19	第51図 三田谷Ⅱ遺跡2区調査区設定図	61
第13図 三田谷Ⅲ遺跡トレンチ土層断面図(6)	20	第52図 2区調査後測量図	62
第14図 三田谷Ⅲ遺跡Ⅰ区調査区設定図	21	第53図 2区SX01実測図	63
第15図 1区調査後地形測量図	23	第54図 2区SX01出土遺物実測図	63
第16図 1区SX01検出状況図	25	第55図 2区SD01・02及び加工段実測図	64
第17図 1区SX01墳丘・石室部上層断面図(1)	27	第56図 2区SD01・02及び加工段上層断面図	65
第18図 1区SX01墳丘・石室部土層断面図(2)	28	第57図 2区谷状地形実測図	66
第19図 1区SX01玄室基底部実測図	29	第58図 2区谷状地形上層断面図	66
第20図 1区SX01羨道部大断面図	31	第59図 2区出土遺物実測図(1)	67
第21図 1区SX01羨道部集石状況図	32	第60図 2区出土遺物実測図(2)	68
第22図 1区SX01掘り方実測図	33	第61図 2区出土遺物実測図(3)	69
第23図 1区SX01羨道部側石加工痕折影図	35	第62図 2区出土遺物実測図(4)	70
第24図 1区SX01出土遺物実測図	35	第63図 2区出土遺物実測図(5)	71
第25図 1区SX02大断面図	36	第64図 2区出土遺物実測図(6)	72
第26図 1区SX02出土遺物実測図	36	第65図 2区出土遺物実測図(7)	73
第27図 1区SX03実測図	37	第66図 2区出土遺物実測図(8)	74
第28図 1区SX03土層遺物実測図	37	第67図 2区出土遺物実測図(9)	75
第29図 1区SX04実測図	38	第68図 2区出土遺物実測図(10)	76
第30図 1区SX04出土遺物実測図	38	第69図 2区出土遺物実測図(11)	76
第31図 1区SK01実測図	39	第70図 2区出土遺物実測図(12)	76
第32図 1区SK01出土遺物実測図	39	第71図 上沢Ⅰ遺跡位置図	84
第33図 1区SK02実測図	40	第72図 上沢Ⅰ遺跡の位置とその周辺の遺跡	85
第34図 1区SK03実測図	40	第73図 上沢Ⅰ遺跡トレンチ配置図	85
第35図 1区SK03及び周辺出土遺物実測図	40	第74図 上沢Ⅰ遺跡SK01実測図	86
第36図 1区SK04実測図	41	第1表 出雲市周辺遺跡一覧	8
第37図 1区SK05実測図	41	第2表 楊伊川放水路事業開削部分遺跡一覧	12
第38図 1区SX05出土遺物実測図	42	第3表 三田谷Ⅲ遺跡1区出土遺物概観表	54~60
第39図 1区出土遺物実測図(1)	43	第4表 三田谷Ⅲ遺跡2区出土遺物概観表	77~83

I 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を本川中流左岸の来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市の上塩治町半分付近において神戸川に合流させるものである。またそれにより下流は、神戸川の自己流量と斐伊川本川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ(第2図)。この計画は、斐伊川の洪水の一部を早くしかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、これに添い、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の埋蔵文化財の分布調査を実施し、その結果を昭和51年3月に『斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告』としてまとめ提出した。また、昭和53・54年度には建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩治を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象とし



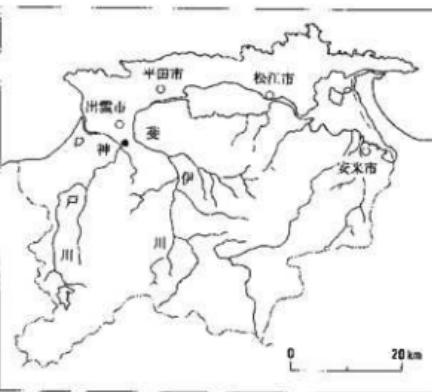
第1図 調査対象地位置図(●印)

ながら、一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに昭和55年3月に『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課および県教委文化課の三者で協議が進められ、平成3年1月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内に所在する埋蔵文化財を発掘調査することが決定した。

2. 調査の経過

平成3年度（初年次）、県教委と建設省中国地方建設局とは、4月11日付けで委託契約を締結し、発掘調査事業がスタートした。現地調査は、5月7日より着手し、12月25日まで行った。調査箇所は、出雲市馬木地区土地区画整理事業の関連で早急に多量の土砂が必要になったため、その採土予定地とされた半分地区三田谷の低丘陵部から試掘調査を始めた。7月初旬にはこの調査結果をもとに協議し、遺構・遺物が発見

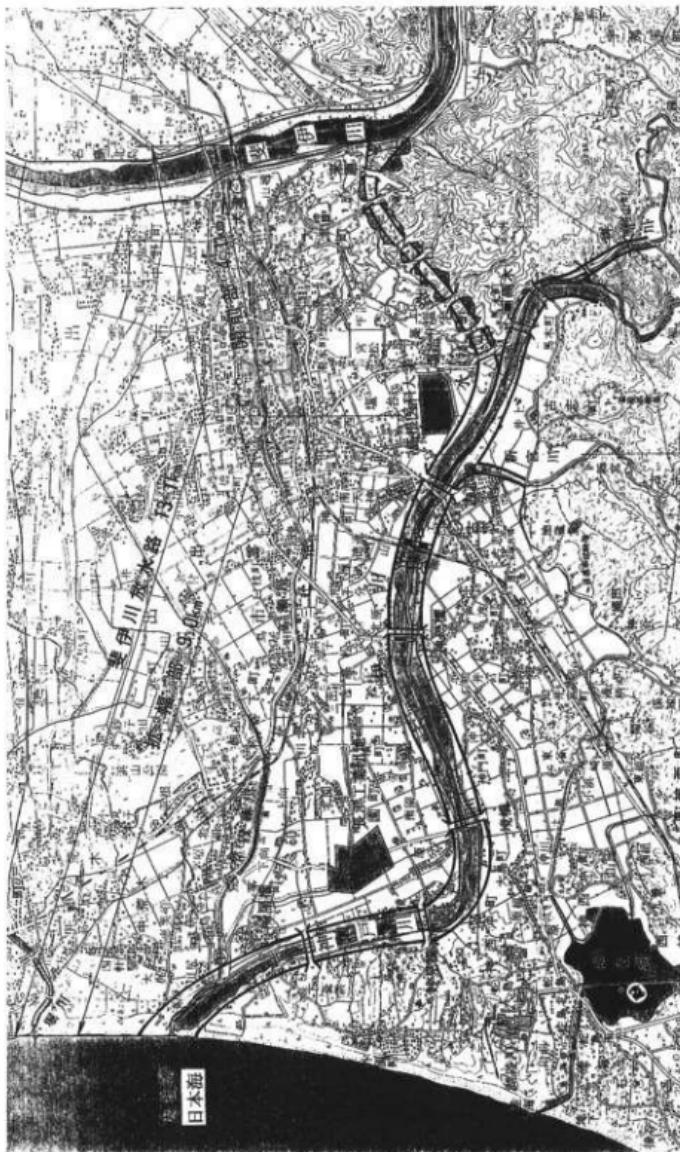


第2図 姫伊川・神戸川及び調査地点位置図（●印）

され、発掘調査の必要となった三田谷Ⅱ遺跡の1区について本調査を実施した。調査面積は約2600m²を予定していたが、途中8月2日には仮設道路設置工事のための誤爆により三田谷Ⅰ遺跡が一部破壊され、このとき多量の遺物が出土したことから、8月中旬の約一ヶ月はこの事後処理に当たる結果となった。また、9月27日には当地方を襲った“台風19号”により現場事務所が倒壊、加えて一部遺物や凶器類の散逸といった被害に遭い、すぐに調査を再開したものの、一方でその復旧・後片付けに手間取り、調査が遅れる結果を招いた。こうしたことから、当年度は約300 m²を残して終了せざるを得なかった。なお、12月9日には池田満雄・渡辺貞幸両氏を現地に招いて調査指導会を開催した。

平成4年度（第2年次）は、4月9日付けで委託契約書を交わし、2班体制で調査に着手した。現地調査は、5月7日からはじめ、12月25日まで実施した。調査は、はじめ1班が前年度調査未了となった三田谷Ⅱ遺跡1区の約300 m²の調査を行い、もう1班が開削部の試掘調査を半分地区三田谷より手掛けることとなった。1区の調査は、途中、調査区南端で新たに横穴式石室墳が確認され、調査区をさらに500 m²広げたため、7月31日までかかって終了した。1区の調査面積は結局2カ年度分を合わせると約3200m²となった。その後は、6月末の時点で行った協議により、三田谷より大井谷にむける工事用仮設道の建設が急がれるとして、1班が大井谷進入口部分の試掘調査にかかった。結果は、広範囲にわたって遺構・遺物を認めたため（上塩治横穴群第14・15支群および大井谷石切場跡）、直ちに本調査に切り替え、約7000m²を対象に発掘調査を実施した。また、もう1班も試掘調査の結果を踏まえつつ、同じく工事用仮設道の建設が急ぐという事情から半分地区三田谷側の上塩治横穴群第20・21支群について直ぐさま本調査にかかり、約7000m²を発掘調査した。なお、この間1区の調査では7月21日に渡辺貞幸・三浦清両氏を現地に招いて調査指導を仰いだ。また、12月20日には中盤以降

第3図 美伊川放水路事業計画図



に行った両調査現場で現地説明会を開催した。

平成5年度（第3年次）は、4月1日付けで委託契約を結び、当年度も2班編成で調査に取りかかった。調査箇所は、1班が開削部の全般的な試掘調査を行い、もう1班が上塩治横穴群第16支群と三田谷Ⅱ遺跡2区の本調査を実施した。現地調査は4月20日から開始したが、本調査班は上塩治横穴群第16支群を6月31日までに終えたのち、引き続き三田谷Ⅱ遺跡2区の調査を実施し、10月20日に終了した。調査面積は第16支群が約2100m²、2区が約2100m²であった。その後は、1班のうち2名が三田谷Ⅱ遺跡の1区・2区の調査を終えたのを機会に本報告書の作成に入った。一方試掘班は、12月17日まで現地調査を行い、開削部の約7割にあたる範囲について遺跡の有無確認調査を終了した。なお、当年度には島根大学汽水城研究センターの協力を得て、拡幅部（古志・長浜地区）の遺跡確認調査も実施した。

3. 調査の組織

調査は平成3年度（1991）から平成5年度（1993）までの3カ年にわたって実施した。三田谷Ⅱ遺跡および上沢Ⅰ遺跡の発掘調査に関わった各年度の関係者は下記のとおりである。

○平成3年度（1991）

調査指導者 池田禎雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、深沢芳樹（奈良国立文化財研究所主任研究官）

事務局 日次理雄（文化課長）、藤原義光（課長補佐）、勝部昭（課長補佐）、高橋研（文化係長）、田辺利夫（島根県教育文化財団嘱託）、加田恵康（同嘱託）

調査員 松本岩雄（埋蔵文化財第3係長）、足立克己（同主事）、鳥谷芳雄（同文化財保護主事）、永井宏昌（同教諭兼主事）、永瀬伸二（同教諭兼主事）、鎌田弘（同教諭兼主事）、森山敏弘（同教諭兼主事）

遺物整理 多久和登紀子、鍵谷由美子、小村静子、太田和子

免掘調査作業員

内田勝之、和田虎雄、秋田忠三、田中重吉、植原幸成、高橋辰夫、内田賢治、坂根建悦、須山林吉、福代寛逸、梶谷重夫、中村省三、石川恒夫、山根貞雄、渡部桂司、岩橋孝典、柳楽孝子、東原敬子、佐藤宣美、小林和子、小林邦子、福田幸子、岡田律子、福代真寿子、石原さやか

○平成4年度（1992）

調査指導者 池田禎雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、三浦清（島根大学教育学部教授）

事務局 日次理雄（文化課長），勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長），山根成二（課長補佐），久家義夫（課長補佐），工藤直樹（企画調整係主事），有田 實（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 島谷芳雄（埋蔵文化財調査センター第1係文化財保護主事），永井宏昌（同教諭兼主事）

遺物整理 小村聰子，太田和子，永田節子，石川とみ子，来海順子，永島いずみ，釣宮和子
発掘調査作業員

内田勝之，和田虎雄，秋田忠三，福代寛逸，植原幸成，須山林吉，高橋辰夫，田中重吉，飯岡協二，吉田 茂，今岡 実，足立省吉，岡 文三，柳楽孝子，東原敬子，佐藤益子，村上智子，神西博江，佐藤宣美，石原さやか

○平成5年度（1993）

調査指導者 田中義昭（島根大学法文学部教授），三辻利一（奈良教育大学教授）

事務局 広沢卓嗣（文化課長），勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長），山根成二（課長補佐），久家義夫（課長補佐），工藤直樹（企画調整係主事），有田 實（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 島谷芳雄（埋蔵文化財調査センター第1係文化財保護主事），林 健亮（同主事），定方克之（同教諭兼文化財保護主事），黒崎康明（同臨時職員），山岡清志（同教諭兼主事），永井宏昌（同教諭兼主事）

協力者 松崎 潤（中国建設弘済会，技術員）

遺物整理 小村聰子，太田和子，永田節子，石川とみ子，永岡麻衣子，永島いずみ，金坂恵美子，釣宮和子
発掘調査作業員

小村聰雄，和田虎雄，秋田忠三，福代寛逸，植原幸成，須山林吉，高橋辰夫，田中重吉，飯岡協二，吉田 茂，今岡 実，石田亨大，庄司俊郎，渡部桂司，柳楽孝子，東原敬子，佐藤益子，村上智子，神西博江，神西 都，安食武雄，飯島 鑑，板倉 博，伊藤猪造，北脇光雄，原 博信，種野四男，棟石庫七，吉田 甫，浜村将幸，藤江伸幸，飯国美代子，石田好子，漆谷達子，奥井久子，高橋加代子，中島和恵，矢田絹子，吉田京子，黒見奈美

Ⅱ 位置と環境

島根県川雲山を中心とする出雲西部地方は、東に宍道湖、西は人社湾、北と南にゆるやかな山々を望む沖積平野として形成された。「出雲國風土記」にも記されているように、その独特的気候風土と文化ゆえ、この地方は「神話と伝承のふるさと川雲」として人々に知られてきた。

川雲平野が現在のような地形に定着したのは、それまで西進して人社湾に注いでいた斐伊川が宍道湖に逆流するようになった江戸時代以降のことである。しかし、これは出雲平野の形成史上、ごく最近のことであり、その歴史は数千年前へ遡る。

出雲平野の形成は、斐伊川、神戸川の2大河川の堆積作用が大きい。また、平野の敵高地形は、大社湾周辺の砂丘地帯、北山山麓の小坂状地帯、平野の南東部に分布する自然堤防帶に大別できる。三田谷のある上塩治地区は神戸川の旧自然堤防とそれに挟まれた沖積低地、その南に広がる丘陵地帯に分類できるが、三田谷はちょうどこの丘陵部の入口部分にあたる。

このあたりは出雲平野の中でも遺跡が数多く集中しているところであり、丘陵部には30余りの支群をもち、その数300穴とも言われる上塩治横穴群を始め、半分城跡などの中世城館も点在する。また、自然堤防地帯には宮松遺跡や篠山遺跡などの集落遺跡もみうけられる。

以下、平野の形成過程を時代を追って見ながら、三田谷、上塩治地区の様子にもふれてみたい。

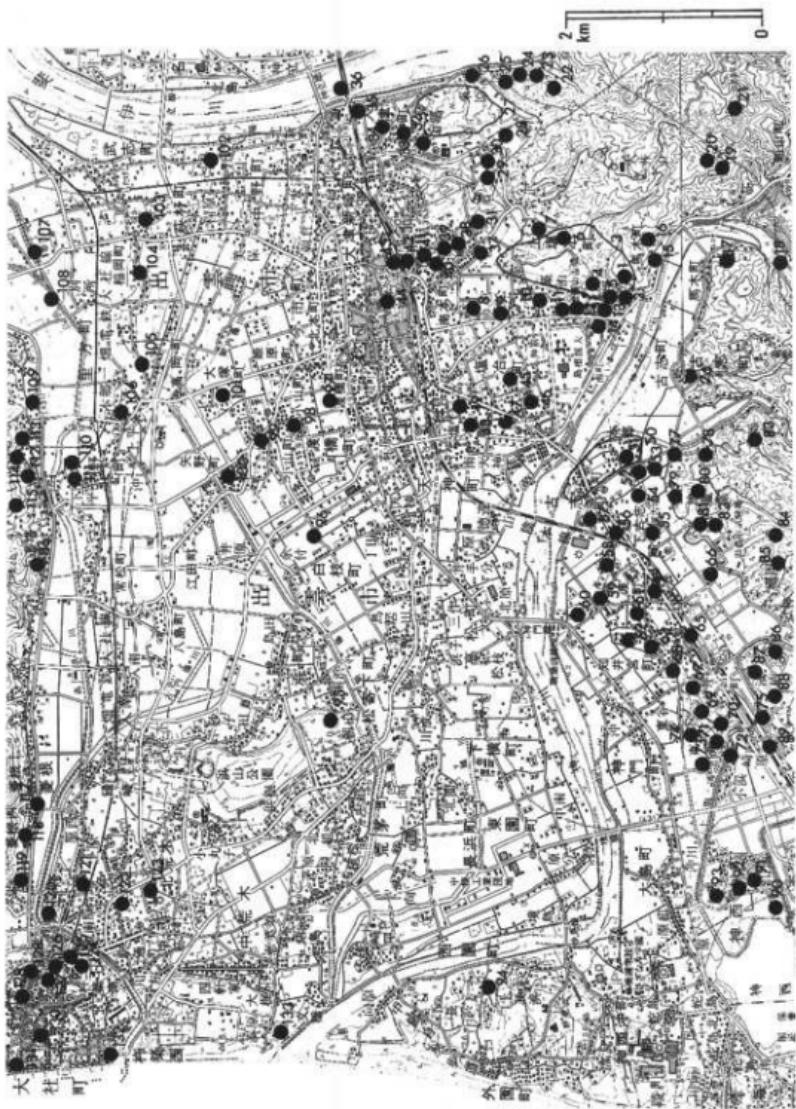
縄文時代の出雲平野は、縄文海進期にあたり、人社町より南東に5kmのびる浜山砂丘がのっている砂州以外、そのほとんどは海面下にあったと思われる。この時代の代表的遺跡として、菱根遺跡が著名であり、北山山麓が早くから開けた地域であることを証明している。

しかし、昭和54年の島根県教育委員会の調査では、他にはないものとされてきた出雲平野の縄文時代の遺跡として三田谷遺跡を確認しており、貴重な資料といえる。

やがて弥生時代が近づくと、大社周辺に人社境内遺跡と原山遺跡が現れる。この遺跡より平野の低湿地部分にも遺跡の広がりがみられることから、平野西部が外海から湾入した人海の様相を呈してきたことがわかる。また、矢野遺跡、知井宮町の多聞院遺跡、天神遺跡などは、居住地域が平野の周辺部まで拡大してきたことをうかがわせる。

弥生時代は稻作が始まっていたと考えられるが、矢野遺跡出土遺物を見ると、縄文的要素がなお強く残り、依然として採集の経済に依存していたことがわかる。三田谷遺跡でも弥生時代中期の遺物が出土していることから、集落が營まれた可能性が強い。

古墳時代になても遺跡の平野中央部への進出は遅く、弥生時代から古代に至る1000年間は沖積地が拡大しないため、居住地域に大きな変化は認められない。ただ、「出雲國風土記」に記載された「神門水海」が砂丘の内側に生成された潟湖であることから、弥生時代の入海が砂嘴によって外海と遮断



第4圖 出雲市周辺遺跡分布図

No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別
1	三田谷ノ遺跡	古墳	46	塙治小学校付近遺跡	地跡	87	開谷古墳	古墳
2	三田谷遺跡	散地	47	弓原遺跡	地跡	88	開谷墓古墳	坑穴
3	上塙治横穴墓群	城	48	大神道跡	地跡	89	古川内遺跡	布
4	半分城跡	穴	49	高西遺跡	地跡	90	源東屋山横穴墓群	墓
5	半分瓦窯跡	路跡	50	伝治氏船跡	散集	91	山地古墳	地跡
6	大井谷城跡	跡	51	吉志本郷遺跡	散集	92	山地遺跡	地跡
7	音沢古墳	吉	52	人側古墳	吉	93	宇治神社古墳	古墳
8	角田遺跡	古	53	忍足橋北遺跡	散集	94	上長秋日塚	古墳
9	官宿遺跡	布	54	古志遺跡	散集	95	馬見崎跡	古墳
10	上塙治豪山古墳	道	55	川原遺跡	散集	96	白枝荒岸遺跡	布
	豪山遺跡	跡	56	上塙治遺跡	散集	97	波瀬道跡	落布
	塙治古官跡跡	古	57	正直寺北遺跡	散集	98	小山遺跡	落布
11	寿昌寺遺跡	集	58	引佐寺参道付近遺跡	散集	99	矢野遺跡	地
	寿昌寺西遺跡	散	59	下古志大黃宮付近遺跡	散集	100	人塚遺跡	地
12	地蔵山古墳	古	60	阿旁院寺付近遺跡	散集	101	大塚古墳	地
	地蔵山遺跡	地	61	東京遺跡	散集	102	萩原！遺跡	地
	半分古墳	地	62	多聞院北遺跡	散集	103	萩原！遺跡	地
13	半分遺跡	地	63	如井宮多聞院遺跡	散集	104	萩原道跡	地
14	出雲工業東西遺跡	地	64	宇渡遺跡	散集	105	高河遺跡	地
15	光明寺南古墳	地	65	嘉義遺跡	散集	106	高浜！遺跡	地
16	光明寺古墳群	地	66	比布智留跡	散集	107	山持川川岸道跡	地
17	小坂古墳	地	67	伊豆留跡	散集	108	甲方別所遺跡	地
18	刈山古墳群	地	68	紀知寺付近遺跡	散集	109	前口遺跡	地
	馬木若利跡	地	69	福知寺横穴墓群	散集	110	甲方八石原遺跡	地
	大井圓遺跡	跡	70	福知寺灰土坑墓	散集	111	高浜！遺跡	地
19	大財古墓	墓		山小屋一部宅裏櫛穴	散集			
20	大坊經塚	冢		墓群	散集			
21	唐松城跡	城		(或)夫毛坂山横穴	橫穴	112	臼口古墳	古
		跡		墓群	墓			地
22	鹿現山横穴墓群	横	71	東谷北横穴墓	横穴	113	船見谷遺跡	散
23	鹿現山古墳	穴		東谷付横穴墓群	墓	114	人前山古墳	古
24	長財遺跡	墓		真幸ヶ丘西横穴墓群	墓	115	蛇山跡跡	散
25	長財横穴墓	地		マキチノ坂横穴墓群	墓	116	色谷遺跡	古
26	水原岩壁跡	地		鶴谷地区次空堀横穴	墓		鎌代古墳	地
27	西谷塙墓群	塙	72	小沢山横穴墓群	横穴	117	西船山塙群	古
28	同附石塙跡	墓		小兵寺横穴墓群	墓	118	菱根園原跡	地
29	音沢古墓	路	73	東谷！遺跡	穴	119	菱根遺跡	地
30	老長原寺	古	74	東谷Ⅰ遺跡	穴	120	佐野免本郷遺跡	地
31	下伏古墳	散	75	問谷西遺跡	穴	121	乙見蛇穴跡	地
32	西谷横穴墓	散	76	井上古墳	穴	122	原山遺跡	地
33	中山丘陵遺跡	墓		井上横穴墓群	墓	123	中分貝塚	地
34	神田遺跡	散	77	放れ山横穴墓群	穴	124	鹿藏山遺跡	地
35	右土手遺跡	散		放れ山横穴墓群	穴	125	鹿藏山遺跡	地
36	斐伊川執持遺跡	散	78	宇賀池尾跡	地	126	鹿藏山古跡	地
37	下沢会館周辺遺跡	散	79	妙走寺山古墳	地	127	鹿藏山跡	地
38	向山城跡	城	80	静土寺山城跡	地	128	美光寺跡	地
39	下沢遺跡	散	81	地蔵堂北横穴墓群	地	129	越後燒賣跡	地
40	久保園横穴墓	散	82	地蔵堂横穴墓群	地	130	御顯寺古墓	地
41	平家丸城跡	城	83	栗柄城跡	地	131	仮ノ宮台楊跡	地
42	健野若平高跡	散	84	通出谷遺跡	地	132	赤坂合羽跡	地
43	大念寺古墳	古	85	深川谷山横穴墓群	地	133	漢原台楊跡	地
44	瑞山古墳	院	86	浅岡古墳	地			
45	神戸寺姫内陶寺	院		西岡南古墳	地			
	神戸寺姫内陶寺	布						

第1表 出雲市及び周辺地区遺跡一覧

されたことがわかる。

弥生時代後期より、斐伊川が平野に出る位置に広がる西谷丘陵には、突如、凹隅突出型を以てする西谷墳墓群が出現する。大神遺跡の壺棺、矢野遺跡の土坑墓群以外、弥生時代の墳墓を知る資料は今のところこの西谷墳墓群を除いて他にはない。

西谷墳墓群は凹隅突出型のもの、前方後方型のもの、墳丘を有しないものがあり多様な構成をなしている。この墳墓の一部が古墳時代にかかるものだとしても、ほとんどは弥生時代後期に築かれたものと理解されている。この中には注目すべき遺物として吉備櫛巻・器台があることから、岡山県地方との関連性も興味深い。

古墳時代は、出雲平野に巨大な墳丘を持つ古墳が出現するのは遅く、古墳時代後期になると言わざるを得ない。前期古墳は目立ったものは見られず、わずかに円墳の山地古墳、前方後円墳の大寺古墳が認められるだけである。いずれにしても、西谷墳墓群から古墳時代にいたる移行期は今後、平野部の上坑墓群の調査によって明らかにされてくるかも知れない。

後期に入ると、大小様々な古墳が丘陵部、平野部に限らず、いたるところに出現する。これはひとえに生活の場の拡大を意味するものであろう。

出雲平野の古墳の分布図を見ると、その分布にムラがあるのがわかる。そしてそれは平野の南側丘陵の縁辺部に集中している。この中で特に集中している地区は2カ所で、ひとつは川雲工業高校から北の出雲高校あたりまでの南北方向につながる一群、もう一つは、神河川をはさんで馬木町から下古志町に至る東西方向につながる一群が最も大きなまとまりである。

さらにこれらの古墳群は地形上の特徴から大きく3つに区分できる。大念寺古墳を中心とする群、上塩冶築山古墳を中心とする群、妙蓮寺山古墳を中心とする群である。

後期古墳には横穴式石室を有する古墳と丘陵の斜面に掘りこまれた横穴墓の2種類がある。古墳には円墳が多いのが出雲西部地域の特色であり、前方後円墳や方墳の多い出雲東部地域とはずいぶん異なる。規模は全長92mに及ぶ大念寺古墳を筆頭に10m弱の円墳も存在する。内部主体は現在知られている限りでは横穴式石室が圧倒的に多い。副葬品としては装身具、武器、馬具、土器があげられるが、規模の小さな古墳は土器が中心で若干の武器を持つ。大きなものは装身具や馬具があり、金銅製のものも珍しくない。

横穴墓は数の上では古墳をしのぐ、ひとつの横穴が単独で存在することは珍しく、10基あるいは20基といった単位でひとつの文庫を形成している。規模は疊3疊くらいの床面積に成人男子の身長くらいの高さのものがふつうだが、丸天井で小さなものも存在する。副葬品には古墳に比べると量的、質的に劣り、須恵器が圧倒的に多く、耳環、玉類、小刀などもみられることから、横穴墓に葬られた人はやや富裕な有力農民層ではないかと思われる。横穴式石室よりも時期は遅く、6世紀後半から7世

紀前半が中心である。

次に、地域別に代表的後期古墳を取り上げてみることにする。

神戸川下流域は古墳の規模、数ともに群を抜く地域である。そのため、出雲平野における古墳文化の中心地であったことは容易に想像がつく。古い順に列挙してみると、下吉心町の天神原古墳、吉志町の妙蓮寺山古墳、上塩治町の半分古墳、今市町の大念寺古墳、上塩治築山古墳、馬木町の刈山古墳群などがある。この中で特に大念寺古墳と上塩治築山古墳は注目に値する。石室の規模と副葬品の豊富さから、当時、出雲平野を支配していた首長クラスが被葬者であることは間違いないと思われる。

さらに、横穴墓でも県内最大規模の上塩治横穴群がある。副葬品では埴丘をもつ古墳には及ばないものの、その数からいってこの地域に相当数の集落があり、癡り豊かな地域であったと思われる。三田谷は、眼前に神戸川を望み、背後の丘陵にこの横穴墓群をかかえる状況から見て、有数の集落が存在したと考えられる。

現在の大社町と出雲市の境にあたる北山西南は古墳の数は平野部と比べると少ないが、地域の生産性がやや低かったことを考えれば納得できる。この一帯では弥生時代以降、人々は砂丘や小規模な扇状地に住み、周囲の水田で稲作を行ったと考えられる。内部主体に箱形石棺をもつ高天原古墳、西組古墳群、鎌代古墳が存在する。横穴では、欠尾横穴群が知られている。しかし、この地域の後期古墳の少なさは生産性の低さだけで説明できるものではなく、古墳が極めて政治的意味合いの強い築造物であることを考えると、南部丘陵の干がこの地域に古墳を造らせなかったとも言えよう。神西湖周辺地区はいわゆる「神門水海」が占めていた地域で、後期古墳は数基が確認されるだけである。横穴式石室を有する古墳としては倉道古墳、崖の岩古墳などが確認されている。ここはむしろ上塩治横穴群と並ぶ横穴の集中地域である。現在、地蔵堂横穴群、福知寺横穴群をはじめ、10数支群が存在する。

律令制時代になっても沖積は不十分で、現在の中央部の水田地帯はところどころが池や沼になっていた。さらに、宍道湖西岸部の平野（現在の斐川町から平田市にかけて）は「入海」になっており、まだ宍道湖の一部であった。斐伊川は「出雲國風土記」によると出雲大川とよばれており、中岡山地の島上山から流れ出て、仁多郡・大原郡を通り、平野に出るあたりで北に向かい、さらに西に曲がって神戸水海に注いでいた。神戸川は飯石郡の琴引山より北に向かって流れ、飯石郡、神門郡の諸郷を経て平野部に入り、「神門水海」に注いでいた。

中央政府は律令体制確立のために経済的基盤を固める必要があり、班田制、条里制の実施に踏み切った。大宝律令の成立により、「郡里制」がしかれたが、「出雲國風土記」によると、天平5年（733）当時、出雲国には9郡62郷、余戸4、駅家6、神戸7（里11）があった。このうち、出雲平野周辺には楯縄・出雲・神門の3郡があった。現在の出雲市街地はほぼ神門郡の中に含まれ、二出谷のある上塩治町は日置郷、朝山郷、出雲郷の境あたりであったと思われる。

第5図 豊川放水路事業開削部分地盤分布図



No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別
1	三田谷Ⅱ遺跡	古墳	20	支葬	横穴	11	寿昌寺遺跡	散布
2	三田谷Ⅰ遺跡	散布	21	支葬	穴	12	寿昌寺古道跡	地質
3	上塙治横穴墓群	地	22	支葬	穴	13	地蔵山古墳	地
-1	第1支群	横穴墓	23	支葬	穴	14	平分遺跡	地
-2	第2支群	横穴墓	24	支葬	穴	15	千分古墳	地
3	第3支群	横穴墓	25	支葬	穴	16	出雲丁業西遺跡	地
4	第4支群	横穴墓	26	支葬	穴	17	池田遺跡	地
-5	第5支群	横穴墓	27	支葬	穴	18	宮松遺跡	地
-6	第6支群	横穴墓	28	支葬	穴	19	神門寺付近遺跡	地
7	第7支群	横穴墓	29	支葬	穴	20	塙治小学校付近遺跡	地
-8	第8支群	横穴墓	30	支葬	穴	21	弓原遺跡	地
-9	第9支群	横穴墓	31	支葬	穴	22	高内遺跡	地
-10	第10支群	横穴墓	32	支葬	穴	23	光明寺南遺跡	地
-11	第11支群	横穴墓	33	支葬	穴	24	光明寺古墳群	地
-12	第12支群	横穴墓	34	支葬	穴	25	音古墓	古
13	第13支群	横穴墓	4	半分城跡	城跡	26	長者原廬寺	寺
-14	第14支群	横穴墓	5	半分瓦窯跡	窯跡	27	間房岩種跡	路
-15	第15支群	横穴墓	6	大井谷城跡	城跡	28	施現山横穴墓群	穴
-16	第16支群	横穴墓	7	青沢古墳	古墳	29	施現山古墳	墓
-17	第17支群	横穴墓	8	上塙治樂山古墳	古墳	30	長恩遺跡	地
-18	第18支群	横穴墓	9	栗山遺跡	遺跡	31	長恩横穴墓	水
-19	第19支群	横穴墓	10	塙治利官館跡	館跡	32	未収岩縫跡	路

第2表 上塙治地区周辺遺跡一覧

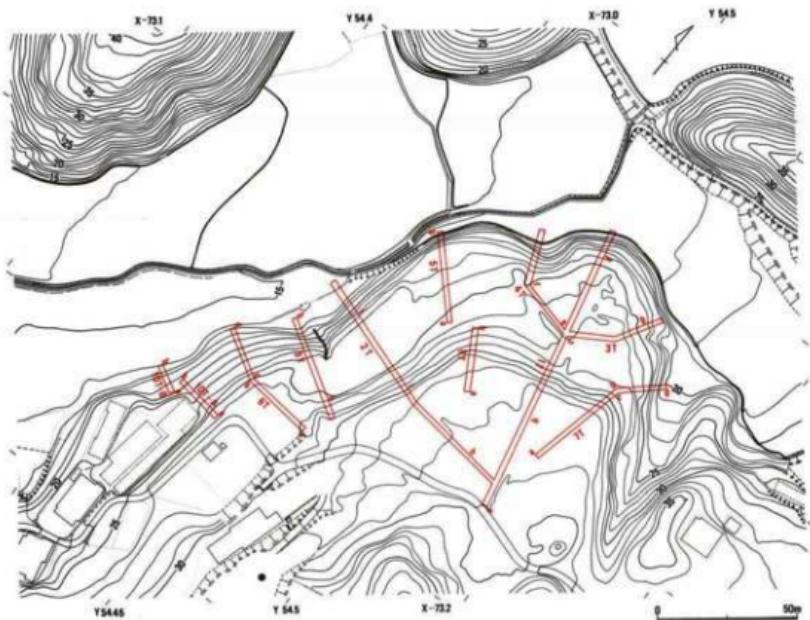
この時代の三田谷には直接言及できないが、周辺には新造院と考えられる神門寺境内廬寺跡や長者原廬寺跡、その他、火葬の広まりを証明する麻骨器をもつ背沢古墓や朝山古墓もあった。古墳時代後期に隆盛を極めた横穴墓群からの墓制の変化は興味深いところである。

次に、中世の城郭、合戦について記した文献をたどりながら、上塙治周辺の城を挙げてみると、平氏が統治していた頃につくられた平家丸城、「雲陽誌」によると塙治判官高貞の居城にあたると考えられる向山城がある。その他、朝山から上塙治の丘陵部につくられた大井谷城、半分城、唐墨城、姉山城等がある。また、神戸川西岸の古志地区に築かれた栗柄城、津十山城は古志氏の居城と考えられる。山城が戦時のための要塞とすれば、平時には館が居城としての役割を果たしてきた。最も著名なものは塙治高貞の塙治判官屋敷跡であろうが、その他いくつかの所在が確認されている。軍事的、政治的な面を考慮し、水運を利用できる湖、河川の近くに造られていることが多い。

以上、出雲平野を概観しながら、時代順に上塙治を中心とする遺跡を紹介してきた。今後、斐伊川放水路事業に加えて、バイパス建設、JR出雲市駅の高架事業と周辺の開発など様々な公共事業に先行する発掘調査により出雲平野の謎がますます解き明かされてくるものと思う。(永井)

III トレンチ調査と三田谷Ⅱ遺跡

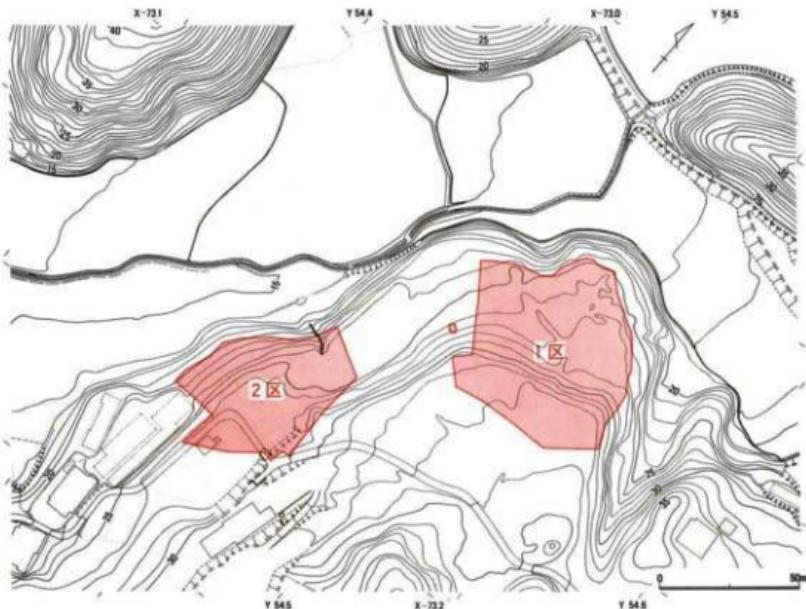
三田谷Ⅱ遺跡は出雲市の南郊、上塩治町半分に所在する。神戸川が丘陵部から出雲平野に流れ出るあたり、神戸川右岸側から北東方向に入り込んだ通称三田谷（1）に位置し、この谷の南側低丘陵、標高12mほどのところに立地している。從来三田谷は、この入り口部分の標高12mほどの段丘上に三田谷（三反谷）遺跡が、また、谷を入って北側から東側の丘陵地にかけては上塩治横穴群第20～26支群などが存在することで知られていた。しかし、本遺跡が位置する南側の丘陵部はいわゆる周知の遺跡が確認されていなかったところである。前年度3月におこなった分布調査では、すぐ近くで須恵器子持壺などの遺物が表採されるなど、この地点も遺跡が存在する可能性が強いとみられていた。初年度の調査箇所としてまずこの地点が選ばれたのは、当地が急遽採土予定地として計画されたことから、早急に遺跡の有無を確認し、遺跡があればその範囲を確定して本調査する必要があったためである。なお、以前の土地利用状況については、戦前には水田であったというが、近年では西側が個人経営の豚舎が建ち並び、また東側は茶園経営者の茶畠を経て、その後昭和40年代半ばからは県立出雲農林高等学校の半分農場として使用されていたとされる。



第6図 三田谷Ⅱ遺跡トレンチ配置図 (1:2000, ●印は子持壺出土地点)

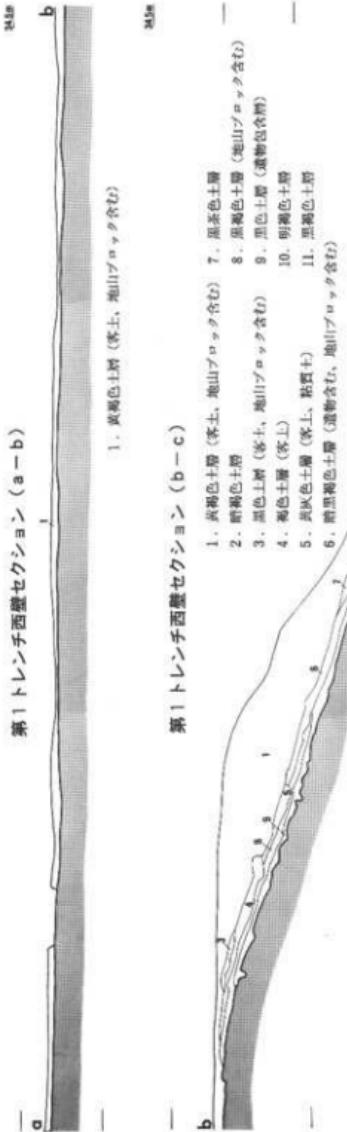
試掘調査は、幅2mのトレンチとなるべく丘陵の等高線に直交するように設定して実施した。設定したトレンチの数は合計10本で（第6図）、重機を利用しながらおこなった。各トレンチの土層観察の状況は、第8～13図に示したとおりであるが、特に1・4・6・10トレンチで遺物包含層（主に黒褐色ないしは暗褐色土層をさす）を確認し、また、1・4・6トレンチでは溝状遺構や段状遺構を検出した。その他8トレンチ以外でもごく少量ながら遺物を認めた。この結果により、この地点でも遺構・遺物の存在が明らかとなつたので、新発見の遺跡としての手続きをとるとともに、すぐさま採土工事に先立つ発掘調査を実施することに決定した。遺跡名は三田谷Ⅱ遺跡と呼ぶこととした（2）。また、本調査が必要な部分として東西に2カ所に調査区を設定したが、便宜上東側を1区（約2600m²）、西側を2区（約2300m²）と呼んだ（第7図）。

- (1) 谷の呼称は、地元では「サンタダン」という。これまで遺跡地図などでは「三反谷」として紹介されてきたが、地籍図にも「三田谷」とあり、今後はこの記載表現が適当であると考える。
- (2) 特にこの地点を指した呼称を確認することはできなかった。そのため、遺跡名は谷部全体の呼称である三田谷にⅡを加えたものである。なおⅠ遺跡は丘陵下の平地部を指している（同時期に行った試掘調査で遺物を発見したことによる）。



第7図 三田谷Ⅱ遺跡調査区位置図 (1:2000)

第1 トレンチ西壁セクション (a - b)



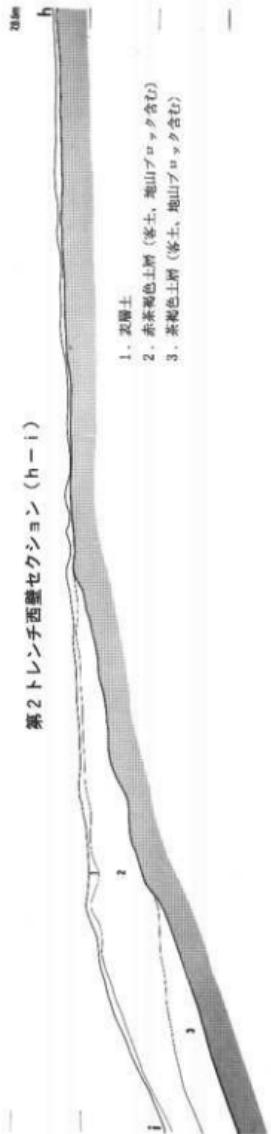
-15-

第1 トレンチ西壁セクション (c - d)

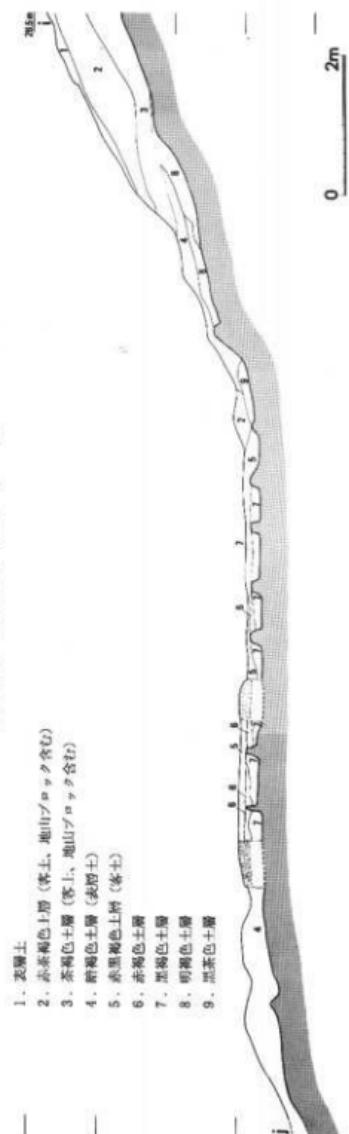


第8図 三田谷II遺跡トレンチ土層断面図 (1) (1 : 80)

第2 ドレンチ西壁セクション (h-i)

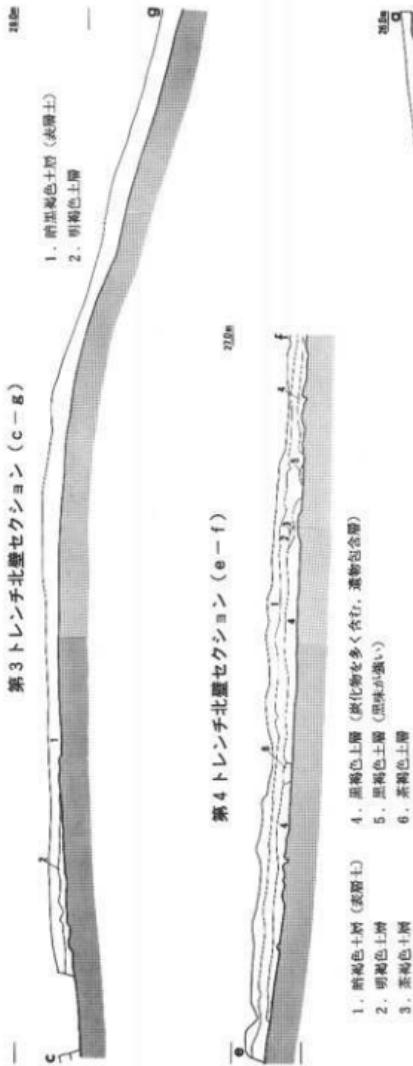


第2 ドレンチ西壁セクション (i-j)

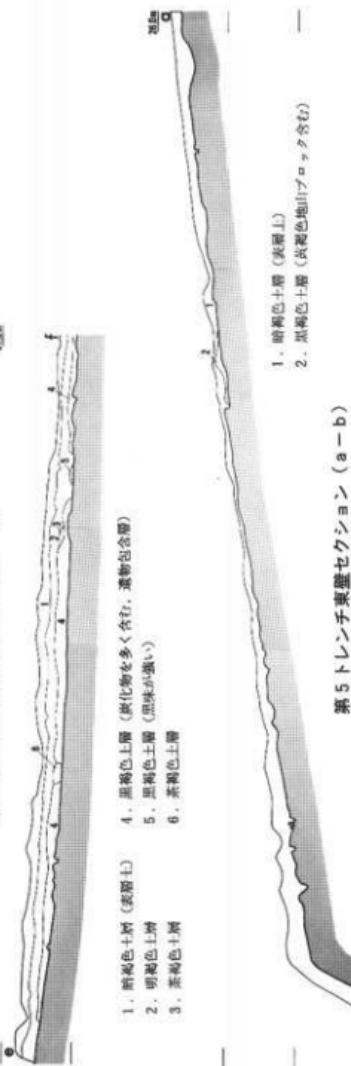


第9図 三田谷Ⅱ遺跡ドレンチ土層断面図 (2) (1:80)

第3 トレンチ北壁セクション (c-g)



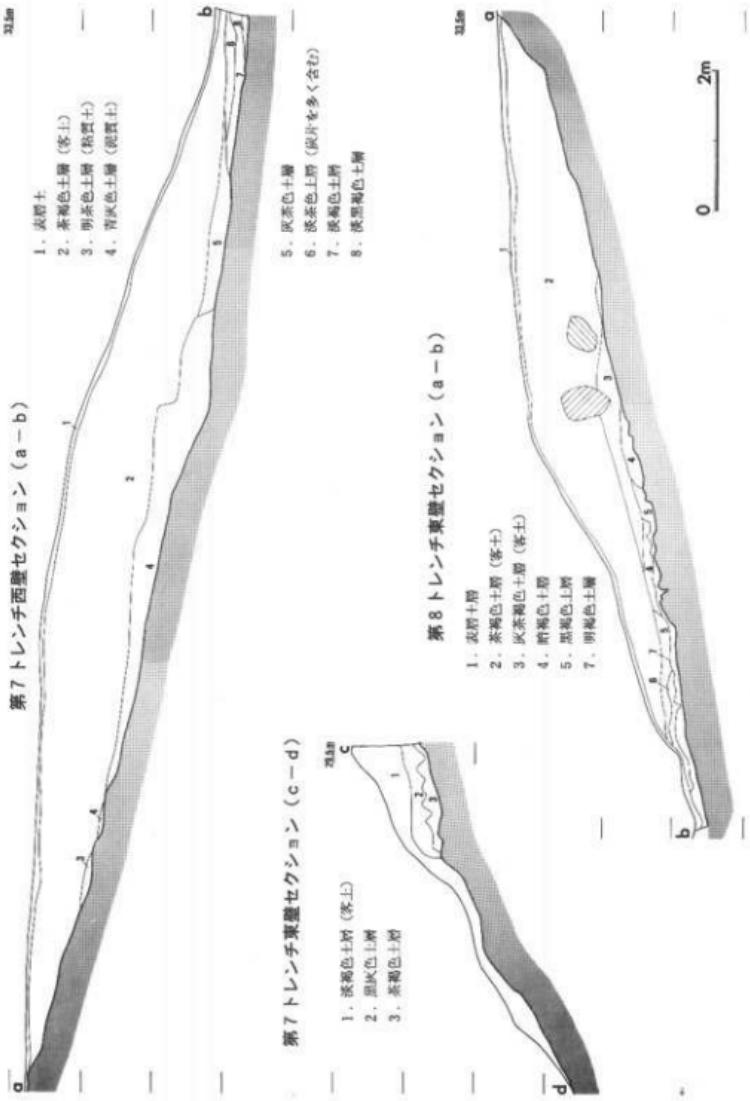
第4 トレンチ北壁セクション (e-f)



第5 トレンチ東壁セクション (a-b)

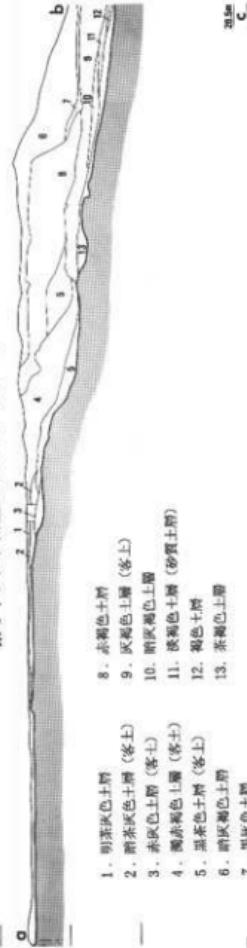


第10図 三田谷Ⅱ遺跡トレンチ土層断面図 (3) (1:80)

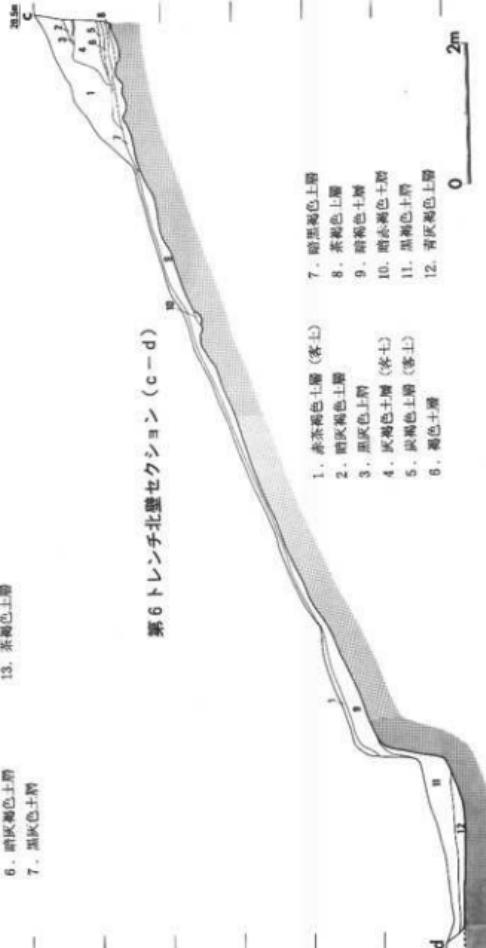


第11図 三田谷Ⅱ遺跡レンチ土層断面図(4) (1:80)

第6トレーンチ南壁セクション (a-b)



第6トレーンチ北壁セクション (c-d)



第12図 三田谷Ⅱ運動トレーンチ土層断面図(5) (1:20)

第9トレーンチ北壁セクション(a-b)



第10-Bトレーンチ北壁セクション(a-b)



第10-Aトレーンチ北壁セクション(a-b)

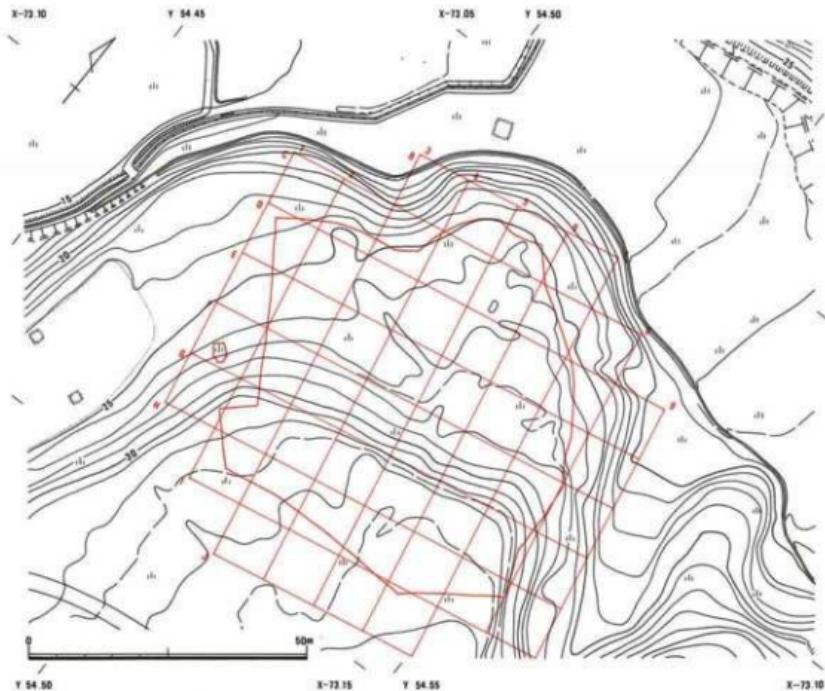


第13図 三田谷Ⅱ遺跡トレーンチ土層断面図(6)(1:80)

IV 三田谷Ⅱ遺跡1区の調査

1. 調査区の設定と層序

1区は、三田谷の入り口部分から東に250mほど入った地点である。試掘により遺物包含層が認められた約2600m²の範囲について本調査することとなった。所在は出雲市上塩治町半分894番地・895番地・3103番地である。本調査は現地を10m方眼に区切り、第14図のように設定して実施した。軸線は丘陵の尾根筋を意識して任意に設定したため、数字ラインは国土座標に対し西に10°43'35"の方向にある。一区画については北西隅の交点をもって呼び、遺構に伴わない遺物の取り上げなどこれを行った。地形は調査前大きく段状を呈していたが、試掘により上段は後世の削平面とわかり、もともと後背地の丘陵が標高28mの変換点辺りまでのびていたものと思われる。



第14図 三田谷Ⅱ遺跡1区調査区設定図 (1:1000)

1区の層序は、下段が茶褐色ないし赤褐色の地山のうえに、遺物包含層である明褐色土層と、表層上である暗褐色土層が堆積していた。また、上段から下段にかけての斜面はやや粘性のある褐色ないし黄褐色土の地山の上に、遺物包含層である黒色土層、褐色土層、暗褐色土層が堆積していた。遺構の検出はいずれも地山面においてであった。調査面積は、途中遺構の検出範囲が広がったため、最終3200m²となった。

2. 1区検出の遺構

1区で検出した遺構は、横穴式石室を有する古墳1（SX01）、土坑墓3（SX02～04）、および性格の判然としない土坑5（SK01～05、土坑墓の可能性のあるものを含む）、計9の遺構である。

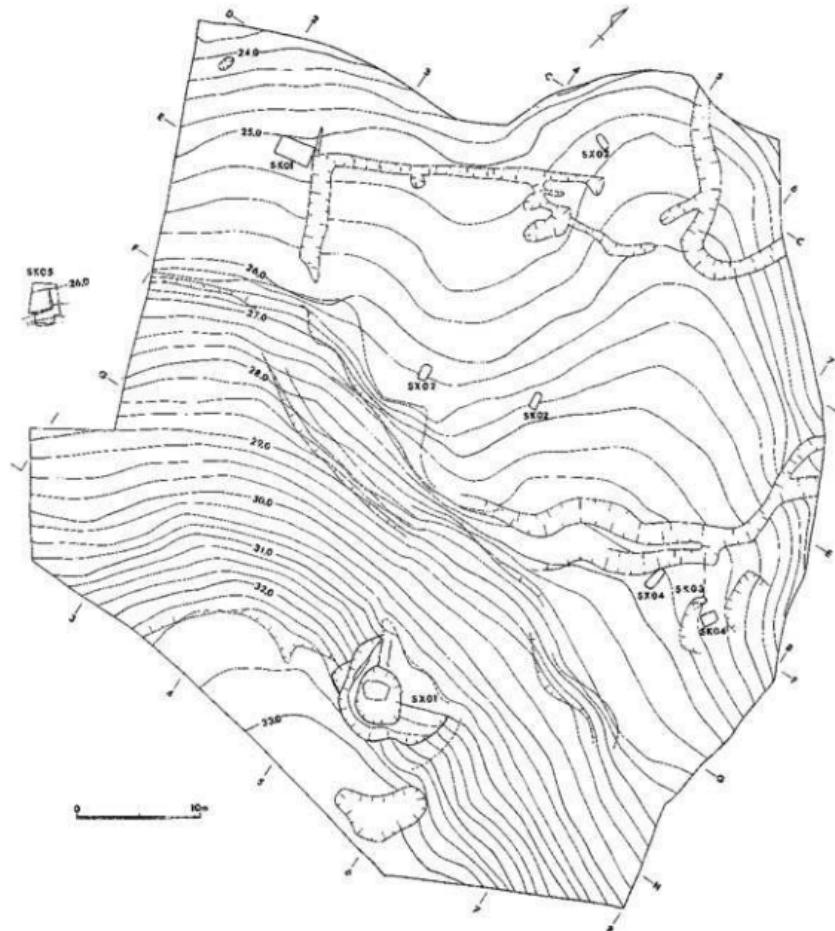
SX01（第16～23回、図版5～19） 調査区の南側で検出した、横穴式石室を内部構造とする古墳である。後世の擾乱で原形が大きく損なわれており、破壊は主体部を中心に玄室部の掘り方にまで及んでいた。比較的残存状況が良かったのは、羨道部と、石室の掘り方、墳丘の一部である。

位 置 標高32mほどの丘陵北側斜面にある。南から北に向かって伸びる丘陵斜面に立地するところから、山寄せの古墳と考えられる。

墳 丘 大半失われていたものの、主体部の掘り方を中心にして北側から東側にかけて残存し、東側で墳裾の一部で弧状に認められたため、円墳と考えられる。B-Bラインの墳端から右室の中心軸と思われる地点までの距離は6.9mで、これを半径として推定復元した場合、径14mほどになる。現状では跡を設けた形跡は認められず、葺石・埴輪などの外衣施設もみられなかった。墳丘は、北側については主体部の掘り方を中心にして盛土によって形成されている。土層の観察によると、盛り土は段階的に施されていることが窺えた。すなわち、(1) Aラインの8～6層・5層・4層、Bラインの25～22層・4層、Cラインの10～6層・5層・4層が盛られた段階、(2) Aラインの3～3層、Bラインの21～17層・3～3層、Cラインの3～3層が盛られた段階、(3) Aラインの2層・1層、Bラインの2層・1層、Cラインの2層・1層が盛られた段階、(4) Bラインの15～5層が盛られた段階と大きく4段階にわたって盛土されたとみることができる。

恐らく、(1)はまず石室掘り方を埋め、石室を構築するためのベースをつくる段階、次に、(2)はそのうえでおそらく石室側壁まで積み上げた段階で次の盛り土を行った段階、(3)は主体部を中心に互層状に盛った段階、そして(4)は墳丘を全体として一気に盛った段階を表したものと推測される。

内部構造 谷側に向かって開口する横穴式石室である。右室主軸は、後述の羨道部をもとにすると、



第15図 1区調査後地形測量および遺構配置図 (1 : 400)

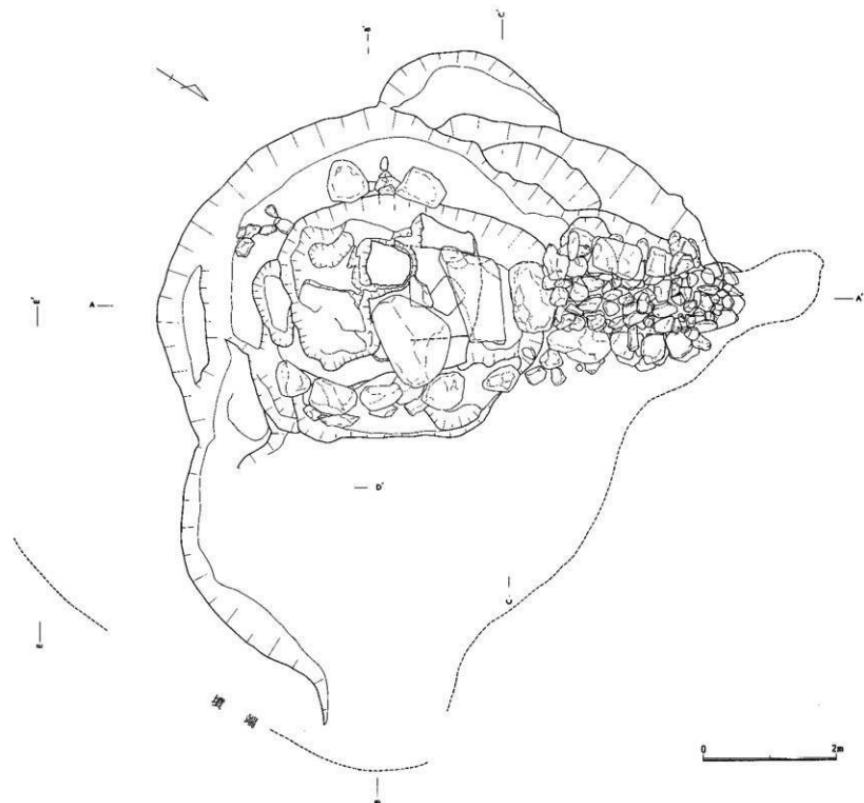
およそN-34°-Wの方向にある。

玄室部は全壁とも失われ、床面の一部とこの周間に掘り込まれた不整形な卵球形状の掘り方が残る程度であった。床面は凝灰岩の岩盤から作り出されており、平面プランを表したものとみられる立ち上がりが認められた。立ち上がりの高さは本來どの程度あったのか不明であるが、そのラインは羨道部に向かってやや内き合う形で施されており、現存長は右側で0.8m、左側で0.6m、幅は羨門側で1.3m、奥壁側で1.4mを測る。これによると、玄室プランは奥に向かってやや広がりをもつ羽子板状になるとみられ、羨道側の數値が幅の最小値と考えてよいように思われる。また、長さについては、ほとんど決め手がないが、仮に奥側の掘り込みと羨道側の掘り込みとに挟まれた岩盤を目安に考えると、少なくとも2.5mはあったと推定される。このことからすると、縦長プランの右室ではなかったかと想像される。玄室掘り方から平坦面のうえにかけてみられた幾つかの自然石（安山岩）は、側壁石を支えるため、または裏込めの目的で置かれたものと考えられる。

なお、玄室部には、石室の壁石や天井石として使われていたと思われる石材がいくつか認められた。大きなものは二つあり、一つは中央寄りの自然石（安山岩）で、大半球面をなすが、一面に平坦面を有している。最大高1.2m、最大幅1.4m、最大厚1.1mである。もう一つは、羨道側にあり、歪ながら箱形の自然石（安山岩）で、最大高1.1m、最大幅1.4m、最大厚さ0.65mを測る。前者は奥壁石、後者は天井石ではなかったかと推定される。また、向石に挟まれてたかたちで、欠損した2つの切石（凝灰岩）が認められた。50cm四方のもので厚さは15~20cm、側壁石として利用されていたと考えられる。さらに、これらの前方に最大長1.1m、最大幅0.7m、最大厚0.45mを測る隅丸方形形状の自然石（安山岩）が羨道に直交したかたちで横たわっていた。出土地点および出土状態からすると、羨門部付近上方に架けてあった天井石の一つでなかったかと想像される。

羨道部は、玄室部にくらべ遺存状況がよく、両側壁が残存していた。最も残りのよかつた右側壁での現存高は床面から1.0mである。現存長2.2m、幅は床面で前方が0.9m、最も狭くなる後方が0.75mである。また、上方の幅で最も狭くなるのは0.8mであり、両側壁はわずかに持送り状になっていたものと思われる。床面は、地山のうえに黒色土をおき、玄室側にかざって径4cm前後の円礫が散かれていた。現存長は1.3mで、開口に向かっては舌状に伸びていた。石材は溶結凝灰岩、石英安山岩、石英斑岩、花崗岩で、最も多かったのは溶結凝灰岩である。いずれも近くの神戸川床で採集されたものと思われる。

側壁は、右側面は少なくとも3段に積まれ、基底石は前後4個の石が並んでいる。うち前3個は凝灰岩の切石で、奥の1個は安山岩の大きめの自然石を置く。これら基底石のすわる床面は前方に向かって高くなっている。2段目・3段目はすべて凝灰岩の切り石が用いられている。左側面は現状では2段しか確認できなかった。基底石は右側面と同様、前後4個の石が並び、うち前3個は凝灰岩の切石で、奥の1個は横長で大きめの安山岩の自然石を据えている。2段目の石は基本的に凝



第16図 1区5×01検出状況図 (1:60)

33.3m²

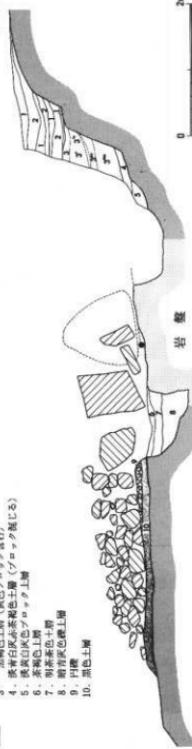
1. 黒茶色土層
2. 開水性土層
3. 茶色土層
4. 黒茶色土層
(ブロッキング)
5. 黒茶色土層
6. 開水性黒茶色
7. 茶色土層
8. 黒茶色土層
9. 開水性黒茶色
10. 前茶色土層
(ブロッキング)
11. 先茶灰茶色土層
(ブロッキング)

12. 前茶色土層
13. 黒茶色土層
14. 前茶色土層
15. 黑褐色土層
16. 前茶色土層
17. 前茶色土層
18. 黑褐色土層
19. 前茶色土層
20. 黑茶色土層
21. 前茶色土層
22. 前茶色土層
23. 前茶色土層
24. 前茶色土層
25. 前茶色土層
26. 前茶色土層
27. 前茶色土層

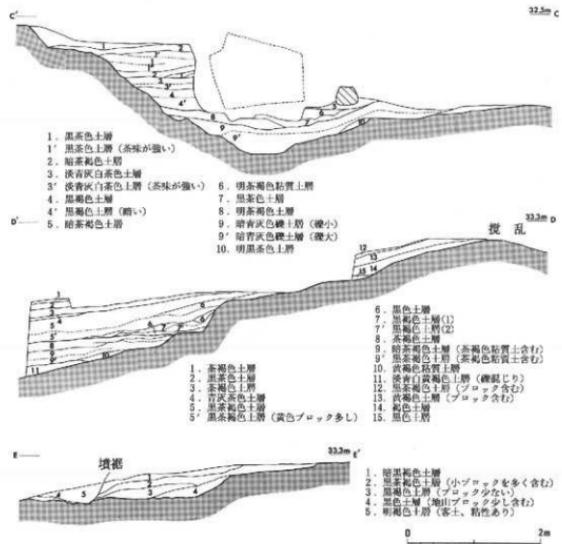


-27-

1. 黒茶色土層 (前茶色土層ブロック含む)
2. 前茶色土層 ()
3. 前茶色土層 ()
3*. 前茶色土層
3**. 前茶色土層
3***. 前茶色土層
4. 前茶色土層 (黒色ブロック含む)
5. 前茶色土層
6. 黑褐色土層
7. 前茶色土層
8. 前茶色土層
9. 前茶色土層
10. 前茶色土層

33.3m²

第17図 1区S×01堆丘・石窓部土層断面図（1）(1 : 60, ●印は頂窓部井戸出土地点)

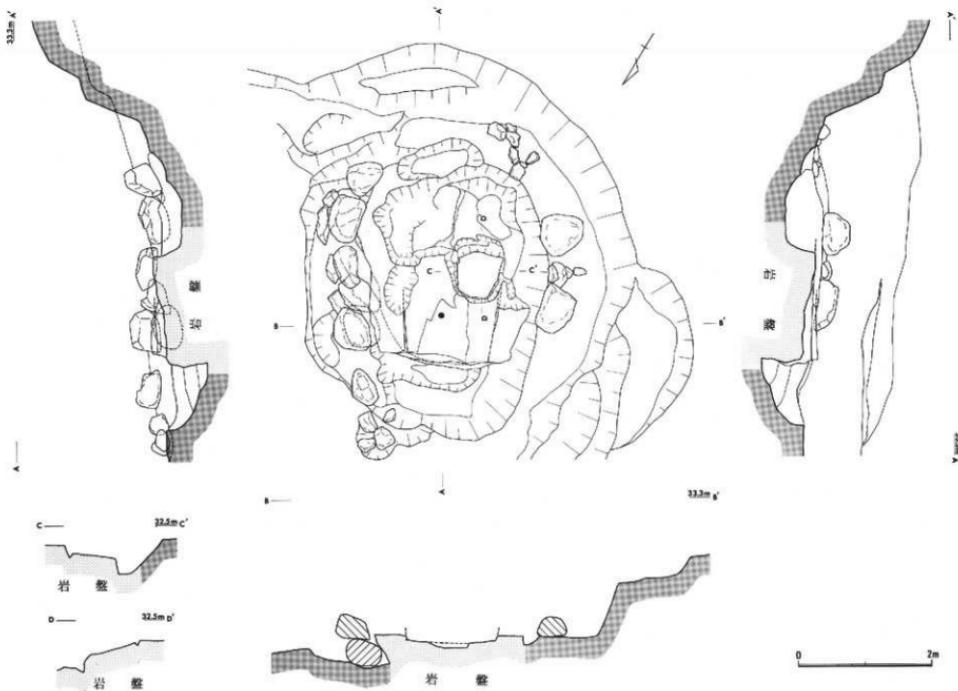


第18図 1区S×0.1塊丘・石室部土層断面図(2)(1:60)

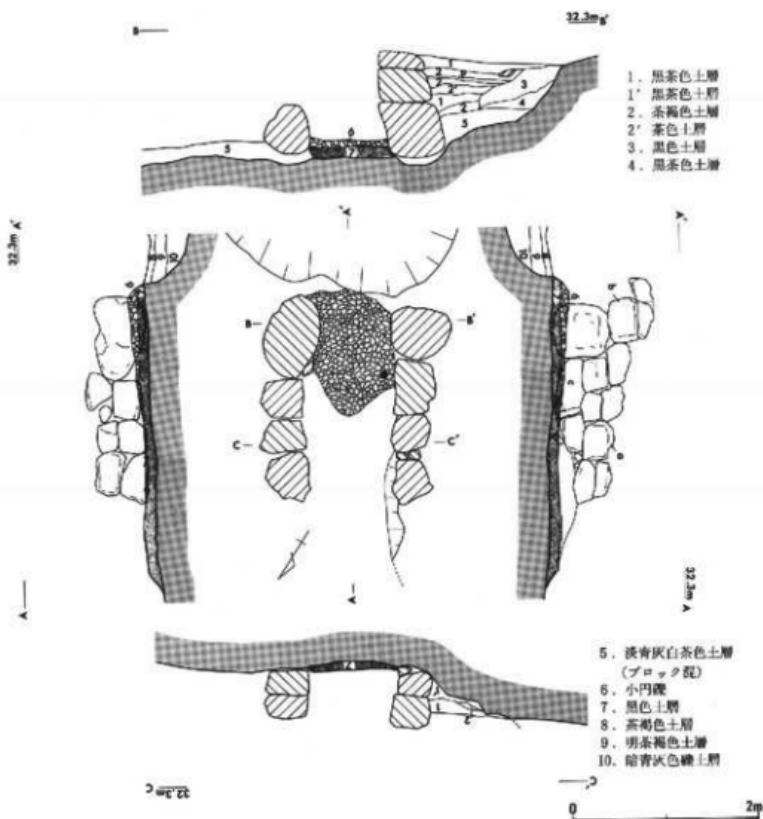
灰岩の切石を用いているが、前より2個目と3個目の透き問には安山岩の自然石が組み込まれていた。切石は、後に記すように加工痕跡が認められたが、このなかには段カット状の加工痕も認められ、切組積みを採用していた可能性がある(図版16の中段)。

なお、側壁の表側の状況は右側面でしか確認できなかったが、裏込め石はほとんど認められない状態であった(第20図-B断面)。

また、この表層部には人頭大ないしはこれよりやや小さ目の自然石がびっしり詰め込まれていた(第21図)。玄室側に最も近い石は、意識的に積み重ねたような感覚である。石材は安山岩がほとんどで、他にはごくわずかの凝灰岩が含まれていた。これは表層部の閉塞状況を示したものと思われる。

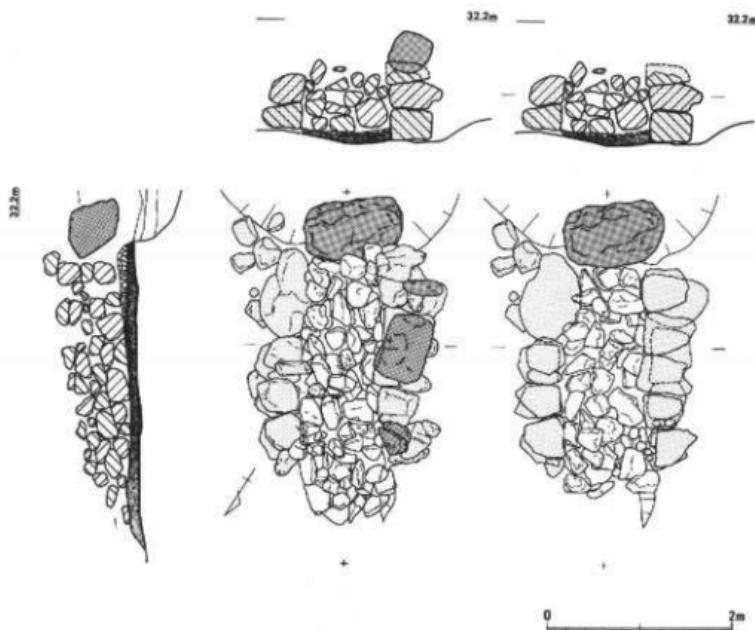


第19図 1区SX01玄室基底部実測図 (1:60, ●印は須恵器壊身片出土地点)



第20図 1区S×01 羨道部実測図 (1:60, ●印は丸玉出土地点)

玄室部掘り方 主体部全体にわたって丘陵斜面をカットして平坦面を設けたのち、さらに玄室部については岩盤の周囲を不整形ながら卵球形状に掘り込んでいる。擾乱を受けて不明な部分もあるが、規模は前後最大長約3.0m、左右最大長約2.6mほどと推定される。深さ・幅は一定せず、羨道部側では幅0.8m、最大深さ0.5mであり、左側では幅0.7m、深さ0.35mを測る。掘り方の中には岩質の地山ブロック混じりの青灰色土がやや堅く詰めてあった。特に左側面の掘り込みは、内側にむかって深く抉ったうえに数個の自然石がはめ込まれてあった。(図版13の下段) これは、軟質の岩盤をさらに補強する目的で行ったものと思われる。



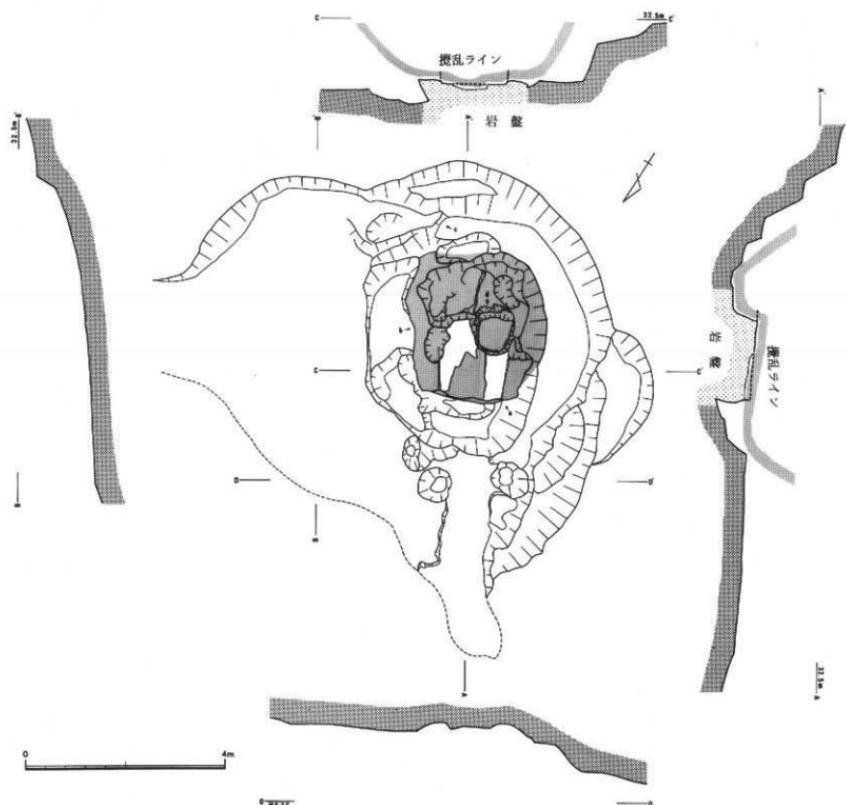
第21図 1区SX01 羨道部集石状況図 (1:60)

石室・埴丘構築方法の復元 以上のような調査結果をもとに、この古墳の埴丘および石室構築の方法をおおまかに復元すると、次のようになるものと思われる。

- ① 埋丘の北側斜面を選び、地山を大きくカットし、主体部をおく場所を中心に、広く平坦面を設ける。
- ② ①で設けた平坦面のうち、主体部玄室部分（岩盤）についてさらに周囲を卵球形状に掘り込む。
- ③ ②で設けた掘り方を固く埋め戻し、また、平坦面にも盛土をして、石室構築のベースをつくる（盛土1段階）。
- ④ その後、石室の奥壁・側壁などを置いた段階で、次の盛り土を施す（盛土2段階）。
- ⑤ さらに、石室を構築した段階（天井石を載せる段階？）で、次の盛り土を施す（盛土3段階）。
- ⑥ 最後の盛り土を施し、埴丘を整える（盛土4段階）。

掘削加工痕と石切痕 この古墳を構築する過程で施された掘削加工痕と、破壊時に残された石切りの痕跡について触れておきたい。

掘削加工痕には、少なくとも2種類のものが認められた。一つは、羨道部の側壁石に残されたも

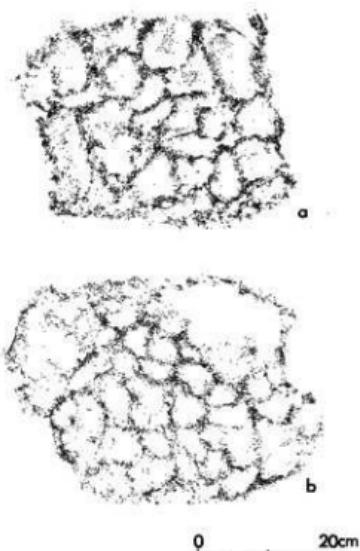


第22図 1区S×0.1 摂り方実測図 (1:80)

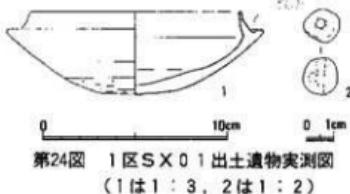
の（第20図a・b・cおよび図版16），全体の地山掘り方に残されたもの（第22図cおよび図版17の下段），および玄室部掘り方の岩盤正面に残されたもの（第22図aおよび図版17の上段）などである。これらに認められた刃先は長方形で、その刃幅は4～5cmであった。これは半ノミ状の工具による掘削・加工痕とみられる。もう一つは、玄室部掘り方の岩盤左側面に認められたもの（第22図bおよび図版17の中段），刃先は確認することはできなかったが、断面はちょうどスコップで削ったように曲面を呈しており、刃幅も広く、その最大値は12cmほどであった。工具としてはおそらく刃部が丸味をもつスキ先状のものが考えられる。この二つの工具は土質・岩質および作業箇所によって使い分けられたようである。

ところで、玄室部の岩盤にはこうした本末の加工痕とは異なる、もう一つの掘削痕が認められた。玄室奥部でみられた床面の破壊痕（第22図d）。特に右側の破壊状況に注目すると、ツルハシ状工具によってほぼ長方形に切られ、その大きさは90cm×75cmほどであった。平成4年度実施した大井谷石切場跡の発掘調査で認められた掘削痕と一致することから、これは石切りの切り出し跡ではないかと推定される。古墳の擾乱が主体部中心に行われ、かつ、石室を構成していたはずの石材が一部を除いて見当たらなかったのは、この行為が凝灰岩（またはその切石）を目的に行われたためとも想像される。

同出土遺物（第24図、図版27） この古墳に作る遺物は、玄室部の擾乱面から須恵器坏片1、同焼片2、羨道部の砾床面から碧玉製丸玉1とごく僅かであった。1は坏身で約1/4が遺存する。口縁部の立ち上がりは受部との界線を明瞭にしつつ内傾し、端部は細くすぼまる。また、受部から底体部にかけては緩やかに弧状を描き、あまり深くはない。なお、器形はもとより胎土・焼成・色調などの諸点で、これと同一のものとみられる坏身片（図版27の24-1'）が、試掘調査の時点では第1トレーニングの盛土中から出土している。こ



第23図 1区S×01羨道部
側石加工痕拓影図（1：8）



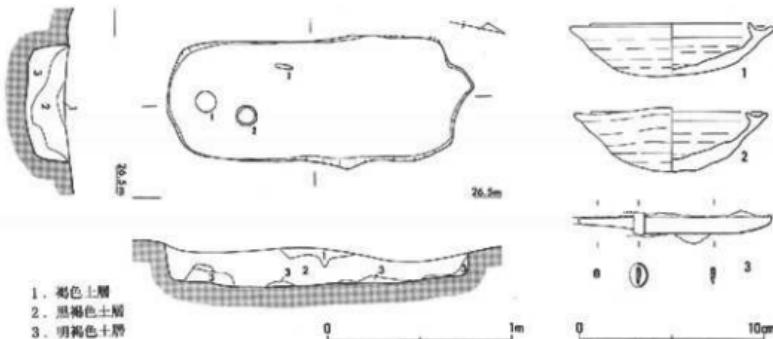
第24図 1区S×01出土遺物実測図
(1は1:3, 2は1:2)

の付近で集中して検出した多數の須恵器片がSX01の副葬品であった可能性を窺わせる資料といえる。碧玉製丸玉2は、原石に制約されてか、すこし形がいびつである。穿孔は片面からのものである。図示はしなかったが、壺片の2点はともに調整は外面が格子状のタタキ目、内面が同心円状のタタキ目を残している。胎土は密、焼成は良好で、色調は明青灰色を呈している。

SX02 (第25図、図版22・23) 調査区のはば中央、下段の緩斜面にいたってまもないところで検出した遺構である。長さ1.6m、幅0.6mのはば長方形を呈し、深さは検出面から最大で21cmである。各壁面はほぼ垂直に近く、底面は平坦である。長軸はほぼ南北方向にある。南よりで、須恵器2点と刀子1点が地山より8cmほど浮いた状態で出土した。須恵器1は外面を上にして、2は内面を上にした状態で、また刀子は刃部を内側に向ける横にした状態で検出した。規模、形態、出土遺物からみて、土坑墓と考えられる。

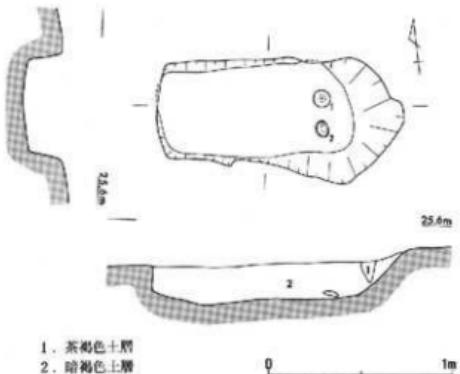
同出土遺物 (第26図、図版27) 1・2はともに短く内傾する立ち上がりをもつ环身で、ほぼ同径・同形の完成品である。2にはやや焼き歪みがみられる。3は刀子で、茎の先端を欠いている。現存長10.6cm、刃部長6.8cm、刃部最大幅0.9cmを測る。茎部には最大径1.1cm、最小径0.9cmの楕円形を呈した金具と木質が認められる。

SX03 (第27図、図版22・23) 調査区の北側、下段緩斜面の先端近くで検出した遺構で、幅0.5m、長さは上端で1.3m、下端で1.1mを測る、やや不整長方形の土坑である。深さは検出面から最大で20cmある。長軸はほぼ東西方向を向く。南北と西の壁面は垂直的だが、東の壁面は傾斜が付いている。底面は平坦である。東側で須恵器2点が地山よりやや浮いた状態で出土した。1・2とも外面を上にした状態で検出した。規模、形態、出土遺物から土坑墓と考えられる。

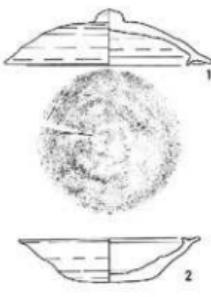


第25図 1区SX02実測図 (1:30)

第26図 1区SX02
出土遺物実測図 (1:3)



第27図 1区SX03実測図 (1:30)



第28図 1区SX03出土遺物
実測図 (1:3)

同出土遺物(第28図、図版27) 1は杯蓋の完形品で、頂部に乳頭形のつまみがつき内面にえりがみられる。天井部内面には竹管文が認められる。2は杯の完形品であるが、立ち上がり(またはかえり)が短く器高も低い。身として図示したが、蓋なのか身なのか判然としない。

SX 04(第29図、図版22・23) 調査区の中央やや東よりの平坦面上で検出した、ほぼ長方形を呈する遺構である。SX 02からは東側に約22mの距離のところに位置する。長軸は南北方向を向く。長さ2.0m、幅0.6mあり、深さは検出面から最大25cmを測る。各壁面はほぼ直立し、底面も平坦である。北側2ヶ所と南側で後世の擾乱が認められた。遺物として須恵器2点が出土した。1は中央寄りの西壁側で検出し、出土レベルは遺構検出面とほぼ同じ高さである。2は約80cmの距離を置きながら土坑中程の高さより2つの破片として検出した。遺構の規模、形態、出土遺物からみて、土坑蓋と考えられる。

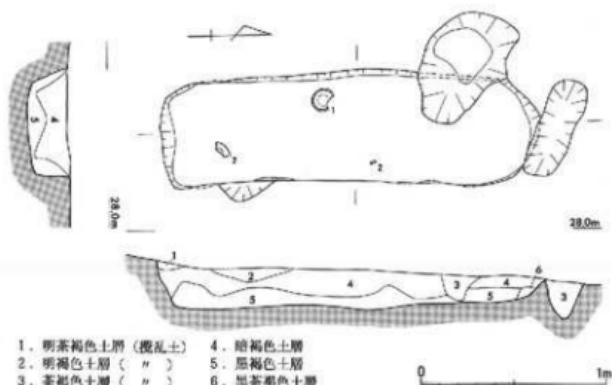
同出土遺物(第30図、図版27) 1・2はともに高台付杯である。1は約4/5が残存し、立ち上がりはやや厚手に作られ、わずかに丸みをもちらながら外傾し、端部は丸く終わる。高台は「ハ」の字に開き、端部はほぼ方形に終わり地に接する。2は杯全体の約2/3の破片であるが、立ち上がりは1に比べさらに緩やかに低く外傾し、次第に薄く作られる。高台も1よりも薄手のうえに開きが大きくなり、端部は鉛直気味の平坦面を有している。

SK 01(第31図、図版24) 調査区の西よりの緩斜面上で検出した、長軸を東北東から西南西方向を向けた土坑である。SX 02からは西方向に20m離れた位置にある。平面プランはほぼ長方形を呈し、底面も平坦であるが、両長辺側に溝が伴い、さらに短辺側に偏って2つのピットがみられるという特異な形態である。全体規模は、長さ2.9m、幅1.6mで、深さは検出面より平坦面までは最

大12cmである。

溝はともに南西側の壁際からはじまり、北東側の壁に至る途中の内ピットの位置で止まっている。長さは北西側が2.1m、深さ9cm、南東側が長さ2.0m、

深さ8cmである。



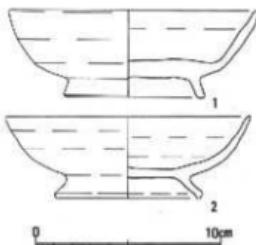
第29図 1区SX 04実測図 (1:30)

また、ピットは北西側のものが上端で40cm、下端で22cm、深さ40.5cmあり、また、南東側のものは上端で30cm、下端で12cm、深さ39cmを測るが、この二つはともにやや内側に向かって傾斜が認められる。この造構に伴って5点の須恵器が出土した。いずれも底面からはわずかに浮いて出土している。遺構の性格については、その特異な形態や遺物のセット関係からすると、住居跡とも考えがたい。

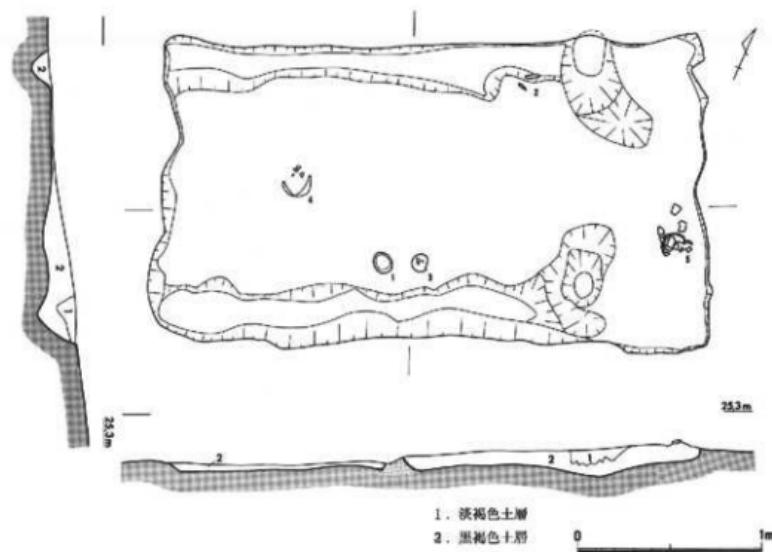
同出土遺物（第32図、図版28）

1は宝珠形のつまみを有する
环蓋の完形品で、内面に肥厚したかえりがつく。2は环の小片で、立ち上がりは非常に短く内傾する。3は环身のほぼ完形品で、体部の立ち上がりはほぼ直線的に外傾し、端部は細くおわる。4は高环の环部片と思われるもので、緩やかに内湾する。5は頸部を欠くが、長頸壺の胴部と考えられるもので、中央やや上方よりゆるやかな肩がつく。肩部には浅くて細い沈線が一条めぐり、偏平の小円板が貼り付けられている。

SX 02（第33図、図版24） 調査区のはば中央の、下段緩斜面で検出した、亞ながら長方形を呈する土坑である。SX 02からは東北東方向に10m、また、SX 03からは南南東方向に23m離れて位置する。長軸はほぼ南北方向を向き、SX 02のそれに等しい。長さ1.55m、幅5.5mで、深さは検出面から最大が20cmである。底面は南側がやや高く少し傾斜があるもののほぼ平坦といえる。出土遺物はなかったが、規模、形態、主軸方位およびSX 02・03と同じ質の覆土からすると、土坑墓である可能性が考えられる。



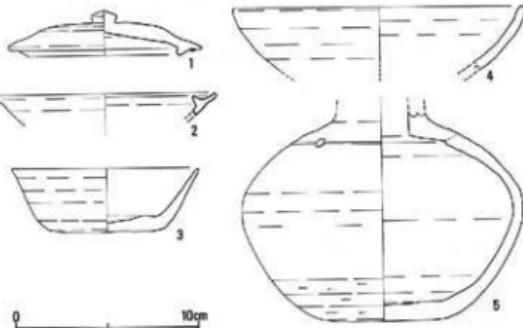
第30図 1区SX 04出土遺物
実測図 (1:3)



第31図 1区SK 01実測図 (1 : 30)

SK 03 (第34図、図版25)

調査区の北東側、下段緩斜面で検出した、やや不整形な土坑である。北西側の上端下端のラインは少しカーブを描くが、北々東側の短辺はほぼ直線でこれより両コーナーがほぼ直角にまわっている。短辺の長さ



第32図 1区SK 01出土遺物実測図 (1 : 3)

0.4m、遺構の現存最大長は1.4mを測る。この短辺をもとに方形の遺構として主軸をもとめると、長軸は北々東から南々西の方向にある。遺物としては、遺構のほぼ中央で須恵器1点が倒立した状態で出土した。また、これを検出する段階で至近距離で須恵器3点を確認したが、遺構に伴う可能性がある。

同出土遺物と周辺出土遺物 (第35図、図版28) 1は立ち上がりが非常に短く内傾する环身で、約2/3が残存し、底部外面中央に少なくとも3本から構成されるヘラ記号が認められる。2は偏平な宝